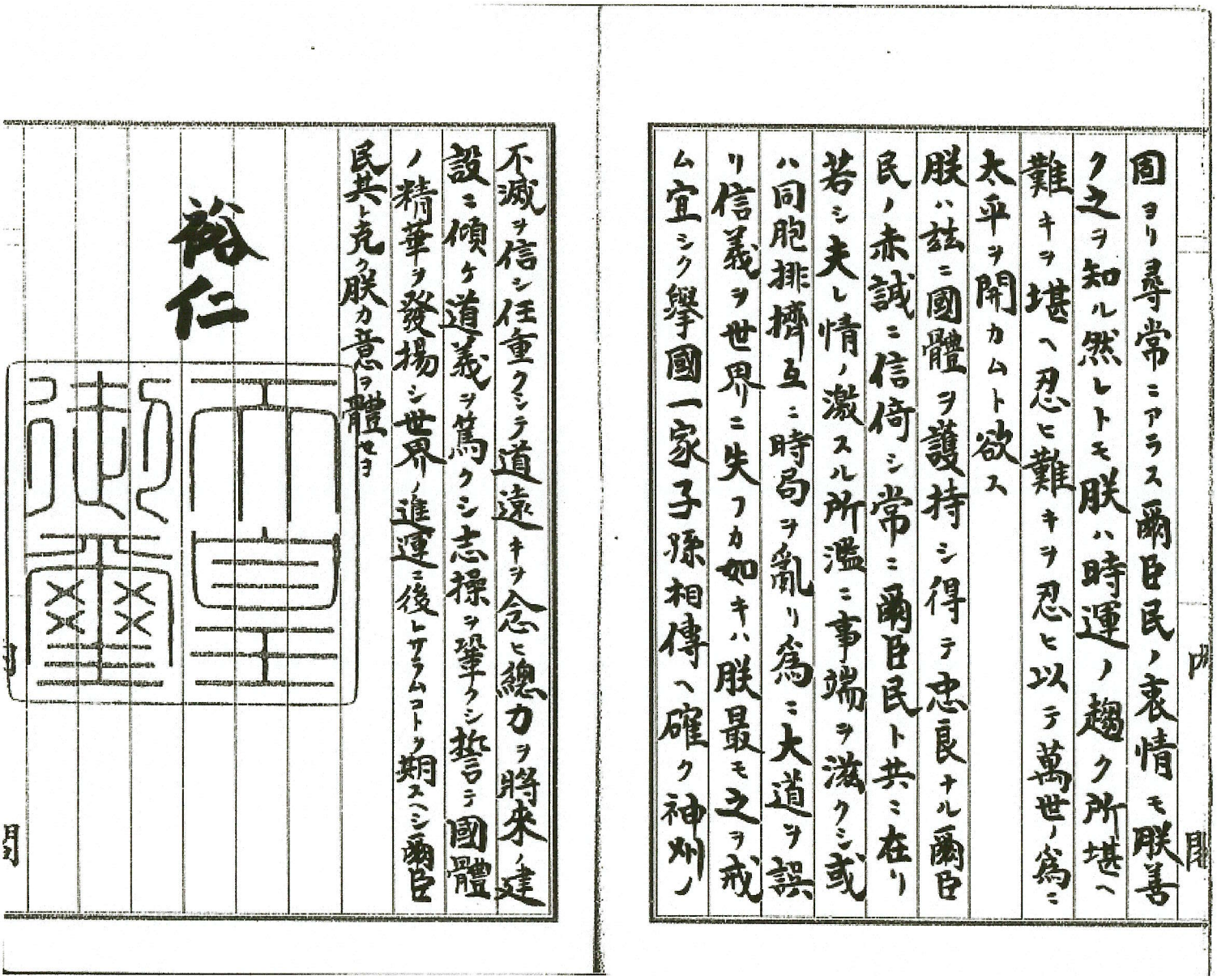
“あの戦争”を80冊で読む



固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ亂リ爲ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク擧國一家子孫相傳ヘ確ク神州ノ

不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ國體ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

裕仁

アジア歴史資料センター（原本所蔵：国立公文書館）Ref.A04017702300「大東亜戦争終結ニ関スル詔書」

（次頁とも）

2025年8月1日（金）～8月28日（木）

朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現狀トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク

朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ

抑帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カサル所曩ニ米英二國ニ宣戰セル所以モ亦實ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス然ルニ交戰已ニ四歲ヲ閱シ朕カ陸海將兵ノ勇戰朕カ百僚有司ノ勵精朕カ一億衆庶ノ奉公各〻最善ヲ盡セルニ拘ラス戰局必スシモ好轉ス世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シ慘害ノ及フ所眞ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尚交戰ヲ繼續セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招來スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯ノ如クンハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕カ帝國政府ヲシテ共同宣言ニ應セシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ對シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝國臣民ニシテ戰陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内爲ニ裂ク且戰傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ惟フニ今後帝國ノ受クヘキ苦難ハ

解　説

戦後 80 年の夏がやってきた。戦争体験文庫のものをはじめ、昭和の戦争やその後の占領の時代を扱った本はおびただしくある。そんな中から、刊行が比較的古く「定番」「古典」となっている本や、論争となった本 80 タイトルを選んで、展示してみたい。80 タイトルとしたのは、80 年にかけてである。上下巻からなる本や、シリーズ本もあるので、実際には 80 冊を超過するが、ご容赦いただきたい。なお、原則的に同一著者の作品は、一タイトルに限定している。

国内体制

『国体の本義』は、文部省が「国体を明徴にし、国民精神を涵養振作すべき刻下の急務に鑑みて」編纂したもので、幕末頃から、天皇が統治する政治体制、といった意味で使われていたこの語の再定義を行っている。終戦の際に顕著なように、「国体」の語は、戦時中に渡って重要な役割を果たした。

治安維持法は、「国体ヲ変革又ハ私有財産制度ヲ否認」する組織に加入したものを罰するもので、大正末に普通選挙と同時に成立しているが、たびたびの改正で罰則が強化、適用要件が緩和されていった。奥平康弘『治安維持法小史』がその経過を明らかにしている。

高橋和巳『邪宗門』は、治安維持法体制下で激しい弾圧を受け、戦後は武装蜂起をして失敗した新宗教団体、ひのもと救霊会を描く。おおよそは大本教をモデルとしているが、満洲開拓団のエピソードは天理教がモデルである。

杉本五郎『大義』は陸軍の若手中隊長が、部下指導の指針として、さらには自身の遺書として記したもので、禅の思想に裏打ちされつつ、天皇に忠義を尽くすべきことを強調したものであり、日中戦争で戦死後出版され、ベストセラーになった。城山三郎『大義の末』は、『大義』に感銘して軍に入った青年が、理不尽な軍隊生活にも、その価値観が崩壊した戦後にもなじむことができず葛藤する姿を描き、城山の自伝的性格もある。

村上重良『国家神道』は、明治維新後の神道国教化政策の破綻後、神道は宗教にあらずとされ、信教の自由の枠外とされた一方で、国家の祭祀として影響力を強め、侵略思想を鼓吹する役割を果たしたと説く。こうした主張に対しては、神道側から葦津珍彦が『国家神道とは何だったのか』で、1945 年 12 月の占領軍による神道指令に遡って批判している。赤澤史朗『靖国神社』は、戦前は陸海軍の共同管理だった同社が、占領期をいかに生き残り、戦後にどういったあり方を模索したかを描いている。

山田邦紀『軍が警察に勝った日』はゴ―ストップ事件を扱う。これは、1933 年大阪で、休日外出中の兵士が、信号（ゴ―ストップ）無視をし、これを巡査がとがめたという些細な出来事が、双方の殴り合いのみならず、内務省対陸軍の壮大な面子・権限争いに発展し、これを昭和天皇が憂いたことにより、双方がやっと矛を収めたという珍事件である。

国民生活

藤井忠俊『国防婦人会』は、民間から生まれ、襷と割烹着をトレードマークとした同会が、軍のバックアップのもと、急速に勢力を拡大していった過程を描いている。

山中恒『ボクラ少国民』シリーズは、児童文学者の著者が、自らの送った戦時下の小学生時

代の教育・制度・文化を、史料によって裏付けて検証している。岩瀬彰『「月給百円」のサラリーマン』は、戦時体制に入る直前での、都市における生活を描き、終章で彼らが「暗黙の戦争支持」に向かっていった姿を示している。農村については、板垣邦子『昭和戦前・戦中期の農村生活』が、産業組合中央会の雑誌『家の光』を使って明らかにしている。また、暮しの手帖編集部『戦時中の暮しの記録』は、1960 年代後半に戦争体験者の投稿を募集して編纂されたものである。

満州

15 年戦争のきっかけとなった 1931 年の満洲事変勃発と、初期満洲国を語るうえでは、これを主導したカリスマ軍人、石原莞爾をおいて語ることはできない。石原には、日蓮宗信仰と欧州戦史研究とを結びつけた『最終戦争論』があり、ここで石原は、戦争の歴史はらせん状に進化しており、日本はソ連との準決勝に勝ち抜いた後、アメリカとの決勝戦、即ち最終戦争に進むべきとした。石原には、現代に至るまで信奉者が多く、エピソードも多いので評伝や研究も枚挙に暇がないが、ここでは先日逝去した福田和也の『地ひらく』を挙げておいた。

事変後、日本軍に擁立された清朝のラストエンペラー溥儀には自伝『わが半生』がある。また満州国の全体像を知るうえでは、多面性を持つ架空生物から書名を取った山室信一『キメラ』が便利である。

首相在任日数の最短ランキング 3 位の記録を持つ石橋湛山は、満州事変の際、人口問題は領土を広げても解決せぬ／大陸に対する国防線は日本海で十分等の理由から、満蒙放棄論すなわち『小日本主義』を主張した。

226 事件

1936 年、226 事件が起こる。皇道派若手陸軍将校らによるクーデター未遂事件であるが、実態を表した名で呼ぶことは陸軍に忖度してはばかられ、起った月日から、その名がついた。天皇親政実現が目的だったが、多くの重臣を殺害された昭和天皇は激怒し、日和見をしていた陸軍幹部も鎮圧に動かざるを得なかった。事件の首謀者の一人、磯部浅一は獄中でこれを知り、嘆き、悲しみ、煩悶し軍首脳や天皇への呪詛を書き連ねた（『獄中手記』）。この呪詛は、三島由紀夫『英霊の聲』のモチーフにもなっている。末松太平『私の昭和史』は、事件に連座して禁固 4 年の判決を受けた末松の回顧録。若手将校に『日本改造法案大綱』で大きな影響を与えていた北一輝も、事件との関係は間接的だったにもかかわらず、処刑されている。その北の辞世と言われているのが「若殿に兜取られて負け戦」。

この事件に限らず、未発に終わったものを含めれば同様のクーデター計画は、この時期多く存在し、包括的に論じたものとして没後まとめられた橋川文三『昭和ナショナリズムの諸相』がある。

日中戦争

1937 年 7 月、盧溝橋における偶発的な衝突は、日本と中国の全面戦争に発展した。開戦というと、1941 年 12 月 8 日の真珠湾攻撃、米英蘭への宣戦布告を思い浮かべる人も多いが、実際に日本が本格的に戦争に突入したのは、この日中戦争である。

開戦当初、日本軍は破竹の勢いで上海・北京といった主要都市を落とし、松井岩根率いる中支那派遣軍は、12月に国民政府の首都南京を陥落させる。この際、日本軍は多くの民間人を殺害したと海外のメディアが報じている。いわゆる、「南京大虐殺」である。戦後国内でも事件は大々的に報じられ、松井は東京裁判で死刑となる。鈴木明は中国側の主張する虐殺者数は過大だと、『「南京大虐殺」のまぼろし』で控えめに指摘したが、これが大虐殺否定論の端緒となった。これらには、洞富雄, 藤原彰, 本多勝一編『南京大虐殺の研究』など批判も多い。なお、松井は故孫文や敵将蒋介石とも親しかったアジア主義者で、『松井石根アジア主義論集』も編まれている。

蒋の名で出された著作として産経新聞に連載された『蒋介石秘録』があるが、これは狭義の自伝ではなく、蒋の回想に加え、公文書や党の記録も参照して作成された。これとは別に、蒋は 55 年間にわたる期間、日記を書き継いでいた。これが紆余曲折の末、台湾国史館に落ち着き、公刊も始まった。邦訳が待たれる。

従軍体験

火野葦平『麦と兵隊』は作家である火野が、その素性を隠して日中戦争に従軍した体験をまとめたもので、戦中期にベストセラーとなっていた。大岡昇平『野火』は、多くの将兵が飢えに苦しみ、人肉食さえ横行したという戦争末期フィリピンでの自らの戦争体験を踏まえている。なお、ダイエー創業者中内功もこの戦場にいた。中内が流通業界を志した原点は、この飢餓体験にあったとされている（佐野真一『カリスマ』）。水木しげる『ラバウル戦記』は、その左手を失った体験と、現地人との交流を描いている。

どうしても従軍記というと、その多数を占めた陸軍軍人のものが多くなるが、海軍に属した側のものとして、吉田満『戦艦大和の最期』がある。学徒出陣で海軍少尉となった吉田が、沖縄戦に「特攻」として赴く戦艦大和に電測士として乗り込み、辛くも生還した体験をまとめたものである。当初は、占領軍による検閲のため、不十分な形での刊行を余儀なくされている。

女性でも、赤十字社の看護婦は、召集を受けて従軍する、軍人に準じたシステムとなっていた。『紅染めし』は、そんな看護婦の手記を収める。

学徒出陣

学徒出陣の定義は複数あるが、狭くは、大学・専門学校に在学中に召集を受け戦地に赴いたものを指す。『はるかなる山河に』は、東京大学から学徒出陣した戦死者の遺稿で、東大の生協が編纂にあたった。この成功を受けて全国版として編まれたのが『きけわだつみのこえ』である。わだつみとは、海の神を指し、海底に眠る戦死者の比喩であり、その声に耳を傾けよ、といった意味である。もっとも、戦争に批判的な遺稿を優先して採用しているので、聖戦を信じていた戦時中の平均的な大学生の思想とは、隔たりがあるといった批判もある。

『ある昭和史』で自分史ブームを作った歴史家色川大吉も、学徒出陣組で土浦の海軍航空隊に赴いている。皇国史観で知られる平泉澄は、東大の教壇で真剣を抜き放ち、「国を想ひ眠られぬ夜の霜の色、ともしび寄せて見る剣かな」「みなさん、しばしお別れです。いや永遠にお

別れです」と言い放って色川らを送り出したという。皇国史観を批判的に扱った議論としては長谷川亮一『皇国史観という問題』が、平泉らの歴史観と、文部省による歴史観とを区別して検討している点でお勧めである。

軍の体質

戸部良一ら『失敗の本質』は、ノモンハン事件から沖縄戦まで、日本軍による 6 つの作戦を取り上げて検討し、日本軍は作戦目的があいまい、主観的で近視眼的な戦略決定、幕僚（参謀）主導型の戦術決定といった、欠点を抽出している。

こうした体質を極端に体現した参謀として、辻政信をあげることができる。指揮系統を無視し、勝手に現場部隊の指揮を執る等、独断専行で知られている。その一方で、兵卒の信頼は厚かったという証言もある。終戦後、シンガポールにおける華人虐殺等、戦犯としての追及を避けるため、軍から別れ単独で行動。帰国した辻が、この体験をまとめたのが、専行ならぬ『潜行三千里』である。辻はその後参議院議員となるが、東南アジアを視察中行方不明となり、後死亡が認定された。

一方、瀬島龍三は、より官僚、優等生タイプの、そつのない参謀である。瀬島は大本営のホープとして太平洋戦争の作戦指導にあたるが、1944 年関東軍に転じ、終戦後は長くシベリアに抑留される。帰国後は伊藤忠商事入りするとともに、中曽根首相のブレーン役も果たした。『幾山河』はその自伝であり、保坂正康『瀬島龍三』は、こうした瀬島を批判的に扱った評伝である。

一方で、こうしたトップクラスではなく、通常の職業軍人の生活と精神を描いたものとしては広田照幸『陸軍将校の教育社会史』がある。

捕虜と戦犯

実は、対米開戦の際にも「特攻」が行われていた。大本営は 1942 年 3 月、去る 12 月 8 日の真珠湾攻撃の際、5 槽の特殊潜水艦が未帰還であり、9 名を戦死と認定、二階級特進などの発表を行っている。なぜ、9 人という中途半端な数なのか。参加 10 人中、残る 1 人である坂巻和男は、対米戦捕虜第一号となっていたためである。『聞き書日本人捕虜』で坂巻は、吹浦忠正にその体験を語っている。同書には、戦陣訓を起草した白根孝之中尉の証言も収められている。日中戦争の泥沼化で、日本軍の軍紀は乱れており、これを正す目的で、陸軍大臣東条英機の名で公付されたのが戦陣訓である。その一節が、「生きて虜囚の辱めを受ける莫れ」。戦陣訓は陸軍兵士向けだったにもかかわらず、海軍軍人、さらには民間人をも束縛する規範となった。

加藤哲太郎『私は貝になりたい』は、捕虜虐待を指揮した B 級戦犯として、いったんは死刑の宣告を受けた加藤の遺書である。『世紀の遺書』は、実際に処刑、あるいはそれを前に自殺した者の遺稿を収める。一例をあげれば、栃木県物部村の優れた産業組合指導者だった池葉東馬は、不合理な判決に鮮血を以て抗議するとして自殺した。

一方で、戦陣訓公布時の陸軍大臣、対英米蘭開戦時の首相であった東条英機は、占領軍に逮捕される際に自殺を試みるも失敗、世の嘲笑を浴びた上に、東京裁判で死刑となった。東条（岩浪）由布子『祖父東条英機「一切語るなか

れ」』は、孫の眼から見た東条英機と、東条家の苦しい戦後を描いている。

極東国際軍事裁判（東京裁判）では、被告が別の被告の弁護側証人として証言することも多かったが、陸軍省兵務局長まで上り詰めた田中隆吉は、検事側証人となって、かつての同僚を指弾した。これを見た重光葵は、「証人が被告席を指さして犯人は彼なりと言ふも浅まし」と詠んだという（秦郁彦『昭和史の軍人たち』）。

東京裁判の全体像を示したものとしては、児島譲『東京裁判』があり、困難な弁護を担当した清瀬一郎には『秘録東京裁判』がある。

沖縄戦

大田昌秀編『沖縄健児隊の最後』は、後に知事となる大田が、自らも属した沖縄師範学校男子部生による勤皇鉄血師範隊員の手記を集めたものである。最近その記念館をめぐる参議院議員の発言が話題になったひめゆり部隊は、沖縄師範学校女子部や県立第一高等女学校の生徒で結成され、主には看護業務にあたった。が、沖縄陸軍病院に動員された生徒・教師 240 人のうち 136 人が死亡したと金城和彦『ひめゆり部隊のさいご』にはある。川満彰・林博史『沖縄県知事島田叡と沖縄戦』は、沖縄戦で殉職した島田を検討し、映画「島守の塔」等が描いたような過度な美化を批判している。

田村洋三『沖縄県民斯ク戦ヘリ』は、海軍司令官大田実が最後に送った電文にある言葉で、「県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」と続いて終わっている。果たして内地が沖縄に「特別ノ御高配」を与えているかは、現状を見る限り甚だ疑問である。なおこの電文は、内容から、前述した島田が起草し、大田はそれをただ打電したのみだという説もある。

空襲・原爆

吉田守男『京都に原爆を投下せよ』は、古都京都・奈良が大きな空襲を受けなかったのは、美術史家ウォーナー博士の進言を軍が容れたため、という「ウォーナー伝説」を否定する。むしろ、京都は有力な原爆投下候補地で、その効果を確認するため通常の空襲を避けていたと本書は指摘する。

高木敏子『ガラスのうさぎ』は、東京大空襲で母と妹を、父を機銃掃射で亡くした著者の体験をまとめたもので、著者は長く語り部活動を続けてきた。野坂昭如『火垂るの墓』は、幼くして両親を亡くし、神戸空襲で養父養母も失って孤児となった兄妹がたくましく生き抜こうとするも、結局は妹を栄養失調で亡くしてしまう物語で、野坂文学の原点である。

『ふたたび被爆者をつくるな』は、ノーベル平和賞受賞が記憶に新しい、日本原水爆被害者団体協議会（被団協）の 50 年史で 2006 年までを扱っている。

しかし、日本も核の軍事利用に手を染めかけていたことを忘れてはならない。日本による原爆開発計画二号研究に関わった物理学者仁科芳雄の『往復書簡集』には、「大サイクロン」「ウラン」「核分裂」といった言葉が頻出する。そして、原爆投下直後の広島へ調査に旅立つ前夜、今次の攻撃が原爆によるものとするトルーマン声明に接し、「声明が事実とすれば吾々“二”号研究の関係者は文字通り腹を切る時が来たと思ふ」と部下の玉置栄彦に書き送っている。

終戦

『地には平和を』は小松左京の実質デビュー作で、もし、日本が降伏をせず本土決戦に突入していたら、といった架空戦記。主人公は当時中学生だった小松の分身。8月15日12時にあるはずだった玉音放送は中止となり、多くの閣僚は未明の事故で死亡または重傷、唯一生き残った阿南陸軍大臣が内閣を組織したという臨時ニュースが流れる。つまり、ポツダム宣言受諾に反対した将校によるクーデターが成功した、という設定である。その後主人公は「黒桜隊」に組織され、米軍と戦うことになる。これはもちろんフィクションだが、阿南を担いでのクーデター計画は存在し、その残滓が宮城事件である。史実では阿南は8月14日夜、割腹自殺を遂げている。角田房子『一死、大罪を謝す』は、副題が陸軍大臣阿南惟幾、とある通り、終戦間際を中心とした阿南評伝である。

当初は大宅壮一名義で発表された半藤一利『日本のいちばん長い日』は、8月14日正午から15日正午までを一時間刻みで追った群像劇で、第一章は「"わが屍を越えてゆけ"－阿南陸相は言った」である。終戦時の首相は鈴木貫太郎。慶応生まれの元海軍軍人で、幼少期から日清日露戦争への従軍、侍従長として226事件で襲撃された体験、終戦を決めた御前会議の模様などを『鈴木貫太郎自伝』で振り返っている。

父の炭坑視察に伴って疎開先新潟の村上から山形へ行った宮脇俊三少年は、帰途今泉駅で玉音放送を聞いた。そして「予告された歴史的時刻を無視」して、何事もなかったように、列車は滑り込んできた。全国民が聞くべきとされていたにもかかわらず、「機関士たちは天皇の放送を聞かなかった」のかと、いぶかしがった。『時刻表昭和史』では、その列車が、今泉発12:30の107列車だったか、13:57の109列車だったかを検討している。後者だったと推測し、「天皇の放送を聞いたあと、坂町行の列車が来るまでの間、私の"時"は停止していたのだから」と結んでいる。

佐藤卓己『八月十五日の神話』は、ラジオや新聞が8月15日を終戦の日として特別扱いする風習は、戦後10年を経た1955年頃にようやく成立したと指摘する。『もう一つの戦後史』で、江藤淳は、無条件降伏は、あくまでも軍隊に限ってのもので、日本が国家として「無条件」に降伏したのではない、と主張した。

戦後

丸山眞男『現代政治の思想と行動』所収の「超国家主義者の論理と心理」は、発表されるや「自分ながら呆れるほど広い反響を呼んだ」という。

『あたらしい憲法のはなし』は、憲法普及会（会長は衆議院憲法特別委員会委員長芦田均）が編纂し、二千万部印刷・頒布された『新しい憲法明るい生活』等を収める。『非武装中立論』は、憲法第9条の戦争放棄条項を政策化したもので、長く日本社会党書記長を務めた石橋政嗣がまとめた。

猪野健治ら編『東京闇市興亡史』は、度重なる空襲により、焼け野原となった都心に突如形成された大マーケットを記録している。

占領

ルース・ベネディクト『菊と刀』は、文化人類学者であった著者が、CIAの前身であるアメリカ大統領戦争情報局の協力者として、日

本占領準備として行った調査をまとめたもので、秀逸な日本文化論となっている。

ジェフリー・ペレット『老兵は死なず』は浩瀚なマッカーサーの評伝で、書名は彼が兵舎で聞いた最も人気のある歌のリフレインとして、司令官罷免直後の米議会における演説で引いたものから来ている。袖井林二郎『拝啓マッカーサー元帥様』は、彼が占領軍総司令官として日本に君臨していた際、日本国民から届けられた書簡を紹介する。書簡はマッカーサー記念館他各所に保存されており、その総計は 50 万点にも及ぶという。結論としては、「もともと人間は権威に寄りかかりたがる動物だが、日本人にはその傾向が民族性といっていいほどに強い」。

歴史研究

1955 年歴史学研究会に属する今井清一・遠山茂樹・藤原彰 3 人の共著で岩波新書『昭和史』が刊行された。当館のOPACで、「昭和史」を検索すると 800 点弱ヒットするが、これが最古のものである。『昭和史』はベストセラーになったが、亀井勝一郎は人物が描かれていない、マイナーな社会運動に重きを置きすぎ等の批判を、後に『現代史の課題』に収録された論考で展開した。これをきっかけに、多数の歴史家や作家が参戦して「昭和史論争」が繰り広げられた。なお、『昭和史』の改訂版は、この論争や、日本共産党の路線転換を踏まえた改訂がなされているので、昭和史論争を検討する際には、旧版にあたる必要がある。

林房雄『大東亜戦争肯定論』は、1.ペリー来航に始まる、百年戦争の終結が太平洋戦争だった、2.日本が掲げた、欧米支配からのアジアの解放という戦争目的は、各国の独立によって実現した、と主張する。これに対しても当然反論は出て論争となった。

オーソドックスな通史としては、愛知大学での講義ノートをまとめた江口圭一『十五年戦争小史』が読みやすい。

昭和天皇

『昭和天皇独白録』は、終戦直後、天皇の御用係だった寺崎英成が聞き取ってまとめたもので、1990 年にその存在が明らかになった。昭和天皇に関する「新史料」発見は、その後も相次いでいる。

松本健一『昭和天皇伝説』は、記憶の王としての側面や、その最晩年に、病床から米の作柄や相撲、オリンピックを気に止め、「知ろし召す」ことによる統治を実践した姿を描いている。沖縄国体行幸が中止になった際の「思はざる病となりぬ沖縄をたづねて果たさむつとめありしを」も、こうした延長線上にある。即位後足を踏み入れたことのない都道府県は、沖縄のみだったためである。

その一方で、1947 年 9 月、すなわち象徴となった身の昭和天皇は、アメリカに「琉球諸島の長期に渡る軍事占領は、アメリカだけではなく、日本のためにもなる」という沖縄メッセージを送っている。これを明らかにしたのが、進藤榮一『分割された領土』である。また千本秀樹『天皇制の侵略責任と戦後責任』は、戦争責任の問題を包括的に扱っている。

請求記号	書名	著者名	出版者	年月	所在
国内体制					
155-0000	國體の本義	文部省編	内閣印刷局	1937.5	書庫1
080-23-1.161	治安維持法小史 (岩波現代文庫:学術:161)	奥平康弘著	岩波書店	2006.6	書庫1
918.6-236-7	邪宗門　上,下 (高橋和巳全集7 小説7)	高橋和巳著	河出書房新社	1977	一般資料
289-1927	大義	杉本五郎著	平凡社	1938.5	書庫1
913.6-2739	大義の末	城山三郎著	五月書房	1959.1	書庫1
081-9-770	国家神道 (岩波新書:青版 770)	村上重良著	岩波書店	1970.11	書庫1
170.2-28	国家神道とは何だったのか	葦津珍彦著	神社新報社	1987.4	書庫1
175.1-アカサ	靖国神社：せめぎあう「戦没者追悼」のゆくえ	赤澤史朗著	岩波書店	2005.7	書庫1
210.7-ヤマタ	軍が警察に勝った日：昭和八年ゴー・ストップ事件	山田邦紀著	現代書館	2017.5	一般資料
国民生活					
372.1-2539	ボクラ少国民 第1部	山中恒著	辺境社/勁草書房	1974-	戦争体験文庫
372.1-2539	御民ワレ (ボクラ少国民:第2部)	山中恒著	辺境社/勁草書房	1975.11	戦争体験文庫
372.1-2539	撃チテシ止マム (ボクラ少国民:第3部)	山中恒著	辺境社/勁草書房	1977.3	戦争体験文庫
372.1-2539	欲シガリマセン勝ツマデハ (ボクラ少国民:第4部)	山中恒著	辺境社/勁草書房	1979.1	戦争体験文庫
372.1-2539	勝利ノ日マデ (ボクラ少国民:第5部)	山中恒著	辺境社/勁草書房	1980.4	戦争体験文庫
372.1-2639	少国民体験をさぐる (ボクラ少国民:補巻)	山中恒著	辺境社/勁草書房	1981.12	戦争体験文庫
390.6-1	国防婦人会：日の丸とカッポウ着 (岩波新書:黄-298)	藤井忠俊著	岩波書店	1985.4	書庫1
337.821-イワセ	「月給百円」サラリーマン：戦前日本の「平和」な生活 (講談社現代新書:1858)	岩瀬彰著	講談社	2006.9	書庫1
611.98-9	昭和戦前・戦中期の農村生活：雑誌『家の光』にみる	板垣邦子著	三嶺書房	1992.2	書庫1

請求記号	書名	著者名	出版者	年月	所在
210.75-1	戦争中の暮しの記録 保存版	暮しの手帖編集部編	暮しの手帖社	1969.8	書庫 1
満洲					
391.1-0000	最終戦争論	石原莞爾著	経済往来社	1972.2	戦争体験文庫
913.6-フクタ	地ひらく：石原莞爾と昭和の夢	福田和也著	文藝春秋	2001.9	書庫1
289.2-55-1	わが半生：「満州国」皇帝の自伝 上,下 (筑摩叢書:245-246)	愛新覚羅溥儀著/小野忍 訳	筑摩書房	1977.12	書庫 1
080-チユウ-1138	キメラ：満洲国の肖像 増補版 (中公新書:1138)	山室信一著	中央公論新社	2004.7	書庫1
319.1-イシハ	小日本主義：石橋湛山外交論集	石橋湛山著/	草思社	1984.5	書庫1
226事件					
210.7-イソヘ	獄中手記 (中公文庫:[い-123-1])	磯部浅一著	中央公論新社	2016.2	一般資料
913.6-0000	英霊の聲 (河出文芸選書)	三島由紀夫著	河出書房新社	1976.2	戦争体験文庫
210.7-スエマ	完本私の昭和史：二・二六事件異聞	末松太平著	中央公論新社	2023.1	一般資料
308-21-2	支那革命外史/国家改造案原理大綱/日本改造法案大綱 (北一輝著作集:第2巻)	北一輝著	みすず書房	1959.7	書庫1
311.3-5	昭和ナショナリズムの諸相	橋川文三著	名古屋大学出版会	1994.6	書庫1
日中戦争					
210.74-1412	「南京大虐殺」のまぼろし	鈴木明著	文芸春秋	1973.3	書庫1
210.74-0000	南京大虐殺の研究	洞富雄, 藤原彰, 本多勝一編	晩声社	1992.5	戦争体験文庫
319.102-マツイ	松井石根アジア主義論集	松井石根 [著]/野村幸一郎編	新典社	2017.11	一般資料
222-0000	日中全面戦争 (蒋介石秘録:12)	サンケイ新聞社著	サンケイ出版	1976.12	戦争体験文庫
従軍体験					
913.6-0010	麥と兵隊	火野葦平著	改造社	1938.9	書庫1
913.6-0000	野火 改版38版 (角川文庫クラシックス)	大岡昇平著	角川書店	1996.6	戦争体験文庫

請求記号	書名	著者名	出版者	年月	所在
916-326	水木しげるのラバウル戦記	水木しげる著	筑摩書房	1994.7	書庫1
397-7	戦艦大和の最期	吉田満著	創元社	1952.8	書庫1
394-1621	紅染めし：従軍看護婦の手記	永田龍太郎編	永田書房	1977.12	戦争体験文庫
学徒出陣					
915.6-22	はるかなる山河に：東大戦歿学生の手記	東大學生自治會戰歿學生手記編集委員會編集	東大協同組合出版部	1947.12	書庫1
916-1223	きけわだつみのこえ：日本戰歿學生の手記	日本戰歿學生手記編集委員会編	東京大学出版会	1952.2	戦争体験文庫
210.7-0000	ある昭和史：自分史の試み	色川大吉著	中央公論社	1975.8	戦争体験文庫
210.04-ハセカ	「皇国史観」という問題：十五年戦争期における文部省の修史事業と思想統制政策	長谷川亮一著	白澤社	2008.1	書庫1
軍の体質					
391.3-0000	失敗の本質：日本軍の組織論的研究	戸部良一［ほか］著	ダイヤモンド社	1984.5	戦争体験文庫
916-1627	潜行三千里	辻政信著	毎日新聞社	1950.6	書庫1
289.1-268	幾山河：瀬島龍三回想録	瀬島龍三著	産経新聞ニュースサービス	1995.9	書庫1
289-1627	瀬島龍三：参謀の昭和史	保阪正康著	文藝春秋	1987.12	戦争体験文庫
396.21-ヒロタ	陸軍将校の教育社会史：立身出世と天皇制	広田照幸著	世織書房	1997.6	書庫1
捕虜・戦犯					
329.6-0046	聞き書日本人捕虜	吹浦忠正著	図書出版社	1987.5	戦争体験文庫
329.48-8	私は貝になりたい：あるBC級戦犯の叫び	加藤哲太郎著	春秋社	1994.10	書庫1
210.75-1750	世紀の遺書 復刻	巣鴨遺書編纂会編	講談社	1984.8	戦争体験文庫
288.3-1927	祖父東条英機「一切語るなかれ」（文春文庫）	岩浪由布子著	文芸春秋	1995.8	戦争体験文庫

請求記号	書名	著者名	出版者	年月	所在
329.67-コシマ	東京裁判 上,下巻 (中公新書:244, 248)	児島襄著	中央公論社	1971	書庫1
329.49-3	秘録東京裁判	清瀬一郎著	読売新聞社	1967.3	書庫1
392.1-1927	昭和史の軍人たち	秦郁彦著	文藝春秋	1982.6	戦争体験文庫

沖縄戦

219.9-オオタ	沖縄健児隊の最後	大田昌秀編	藤原書店	2016.7	一般資料
916-2545	ひめゆり部隊のさいご：太平洋戦争沖縄学徒隊の悲劇 (少年少女世界のノンフィクション:18)	金城和彦著	偕成社	1966.8	戦争体験文庫
219.9-カワミ	沖縄県知事島田叡と沖縄戦	川満彰, 林博史著	沖縄タイムス社	2024.4	一般資料
289.1-1332	沖縄県民斯ク戦ヘリ：大田実海軍中将一家の昭和史	田村洋三著	講談社	1994.3	書庫1

空襲・原爆

210.75-102	京都に原爆を投下せよ：ウォーナー伝説の真実	吉田守男著	角川書店	1995.7	書庫1
913-タカキ	ガラスのうさぎ 新版	高木敏子著/武部本一郎画	金の星社	2000.2	書庫1
913.6-ノ-8	アメリカひじき・火垂るの墓	野坂昭如著	文藝春秋	1968.3	書庫1
369.37-ニホン	ふたたび被爆者をつくるな：日本被団協50年史：1956-2006 本,別巻	日本原水爆被害者団体協議会日本被団協史編集委員会編著	あけび書房	2009.5	一般資料
289.1-ニシナ	大サイクロトロン・二号研究・戦後の再出発：1940-1951 (仁科芳雄往復書簡集：現代物理学の開拓:3)	仁科芳雄 [著]/中根良平 [ほか]編	みすず書房	2007.2	書庫1

終戦

913.6-コマツ	地には平和を (新風舎文庫)	小松左京著	新風舎	2003.11	書庫1
210.75-1927	一死、大罪を謝す：陸軍大臣阿南惟幾	角田房子著	新潮社	1980.8	戦争体験文庫
210.7-16	日本のいちばん長い日：運命の八月十五日	大宅壮一編	文芸春秋新社	1965.8	書庫1

請求記号	書名	著者名	出版者	年月	所在
289.1-1021	鈴木貫太郎自伝	鈴木一編	時事通信社	1968.4	書庫1
686.2-103	時刻表昭和史 増補版	宮脇俊三 [著]	角川書店	1997.8	書庫1
361.45-サトウ	八月十五日の神話：終戦記念日のメディア学 (ちくま新書:544)	佐藤卓己著	筑摩書房	2005.7	書庫1
210.76-6	もう一つの戦後史	江藤淳著	講談社	1978.4	書庫1
戦後					
311-マルヤ8	現代政治の思想と行動 上,下巻	丸山眞男著	未來社	1956-1957	書庫1
080-23-2.264	あたらしい憲法のはなし：他二篇：付英文対訳日本国憲法 (岩波現代文庫:社会:264)	高見勝利編	岩波書店	2013.9	一般資料
319.8-イシハ	非武装中立論 (社会新書:3)	石橋政嗣著	日本社会党中央本部機関紙局	1980.10	書庫1
210.76-11	東京闇市興亡史	東京焼け跡ヤミ市を記録する会〔著〕/猪野健治編	草風社	1978.8	書庫1
占領					
389.1-0000	菊と刀 上,下巻 (現代教養文庫:15,16)	ルース・ベネディクト著	社會思想研究會出版部	1951.7	書庫1
289.3-マツカ	老兵は死なず：ダグラス・マッカーサーの生涯。	ジェフリー・ペレット著	鳥影社	2016.1	一般資料
210.76-33	拝啓マッカ-サ-元帥様：占領下の日本人の手紙	袖井林二郎著	大月書店	1985.8	書庫1
歴史研究					
081-9-223	昭和史 (岩波新書:青-223)	遠山茂樹, 今井清一, 藤原彰著	岩波書店	1955.11	書庫1
204-51	現代史の課題	亀井勝一郎著	中央公論社	1957	書庫1
210.6-0000	大東亜戦争肯定論 普及版	林房雄著	追悼出版刊行会	1976.8	戦争体験文庫

請求記号	書名	著者名	出版者	年月	所在
210.7-115	十五年戦争小史 新版	江口圭一著	青木書店	1991.5	書庫1
昭和天皇					
210.7-46	昭和天皇独白録：寺崎英成・御用掛日記	寺崎英成, マリコ・テラサキ・ミラー編著	文藝春秋	1991.3	書庫1
288.41-63	昭和天皇伝説：たった一人のたたかい	松本健一著	河出書房新社	1992.4	書庫1
080-23-1.91	分割された領土：もうひとつの戦後史（岩波現代文庫:学術:91）	進藤榮一著	岩波書店	2002.11	書庫1
210.6-チモト	天皇制の侵略責任と戦後責任：新装版	千本秀樹著	青木書店	2003.1	書庫1

所在は一例を示したもので、複本がある著作も多数あります

2025年8月

奈良県立図書情報館編・発行